



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「満月四人組デカン高原の旅Ⅲ 奇跡の再会①」

今まで述べてきたのは、偶然の産物である。

偶然の反対は「必然」である。わが輩がこれから語ろうとする「奇跡」は偶然なのか、必然なのか、実はわが輩自身よく分からない。

そこで、ジャイナ教の教えから考えてみたい。

曰く「ある観点では、ある。ある観点では、ない。ある観点では、あり、またない」これをわが輩流に入れ替えてみる。

「ある人では、奇跡はある。ある人では、ない。ある人では、奇跡はあり、またない」(肯定-否定-肯定そして否定)

つまりジャイナ教は、これだというものがない。相対主義である。その人の見方・視点によって違うので、「私が正しい」などとロゲンカする必要もない。

また、「神さま」を認めない。もし、創造主がいてすべてを創るのなら、建築業もいらぬし、コックさんもいらぬ。戦争だっておこらぬ。神さまは「善」だから、この現世は「天国」でなければならない。

(ところがどっこい。この世は争いばかりだ。これを「試練」と言うなら、こんな残酷なことはない。そんなものは神学のまやかしだよ)

奇跡はだいたい神さまが創る、あるいは与えるものだ。神がないなら、わが輩の体験した「奇跡」には、一体どのような意味があるのだろうか。

このような問題を考えるとき、わが輩が常に参考にするのが数理統計学者や機械工学者などの理系のご意見である。その内の一人わが論争の友、物理学徒のJ衛門は言う。

「大魔王よ。必然というのは100%でなければ必然と言わない」

(なるほど・・・99%の必然はないのか・・・)

「しかしながらJ衛門よ。ある点では必然で、ある点では偶然である、とも言えるのではないか。そうであるなら、やはり、あれは奇跡だ！」

われら四人組は、ワルダーを午前八時に出発、まずナーグプルに向かった。一九五六年十月十四日に、三十万人の不可触民がカーストの桎梏から逃れるために、仏教に改宗した広場に立ち寄った。わが輩が最初に訪れたのは、一九七一年であった。その

ころは野っ原に小さな仏教寺院だけがあった。次に通称ドラゴン・パレスという日本寺に寄り昼食を摂った。すでに時計は午後一時になっていた。ジャバルプルへの途中に、デカン高原のジャングルを通らなくてはならない。しかも悪路だと聞いていたので明るいうちに着けるか不安になった。

ところで、わが輩のジャバルプル行きを目的を語っておかなければならない。わが輩は八年前から、ある親子の“追っかけ”をしていた。

(その動機について話すと三時間はかかるので割愛)

昨年五月ヒマラヤのガンジス河源流(4,200m)に向かう途中、老いたる夫婦行者に出会った。

「どこから来られたの、行者さまよ」

ジャバルプルだと言うので、親子を知っているか、聞いてみた。

「ああ、あの親子ならいるよ」

この情報を得て、機会があれば立ち寄ってみたいと思っていた。偶然にも、その好機をつくってくれたのが満月亭の女将さんであった。(感謝!)

実は、わが輩は二〇〇八年九月この親子の村を訪ねていた。しかし、親子に会ったわけではない。彼らが不在なのは分かっていたが、どのような生活環境で育ったのか、見てみたいという思いがあったからである。

われらがジャバルプルに近づいたとき、すでに街道筋は薄暗くなっていた。わが輩の薄れた記憶では、村への門を正確に確認できなかった。やむなく門を通過し市内に向かった。

わが輩の記憶を霧で覆ったのは、神の遊戯(リーラ)であろうか。もし神の所作なら、明日何かが起こる、という予兆であろうか。

(いいや、われらは疲労困憊にて「予感」など露ほどもなかった。疲れたよ～)

次号では、親子の正体を一気に語り尽くそうではないか。乞うご期待。